

2017年 TUFSS ショートステイプログラム

—『異文化体験型シラバス』実施の成果と今後の課題—

内海陽子・宮城徹

【キーワード】 ショートステイプログラム、異文化体験型シラバス

1. はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下 JLC-TUFS）では、海外の大学生・大学院生が日本国内の大学に来て学ぶ「TUFS ショートステイプログラム」を2012年¹より行っている。2017年1月11日から2月8日には、ショートステイウインタープログラム（以下 SSWP）2017を、2017年7月18日から8月8日には、ショートステイサマープログラム（以下 SSSP）2017を実施した。SSWP2017のプログラム評価アンケートでは「このプログラムをほかの人に勧めようと思いますか」という質問に対し「非常にそう思う」は86.49%、「そう思う」は13.51%であった。一方、SSSP2017では同じ質問に対し「ぜひ勧めたい」という回答は47.83%、「勧めたい」は43.48%であった。SSWPも SSSPも参加者から高評価を得ていると言って良いだろう。

2012年のプログラム発足当初、このショートステイ（以下 SS）プログラムは「異文化体験型シラバス²」により、「日本語でインターアクションを頻繁にもてるように、コースデザイン」されたもので、「午前中の日本語授業で学んだことを、午後の活動で生かす」ことを目標としてきた（藤森・宮城・中村・荒川, 2013）。しかし、参加人数の増加、プログラム期間の短縮等、近年においてその実施条件には変化が見られる。また、SSプログラム開始当初は、初級後半までを終えた日本語運用能力がある程度高い参加留学生を想定していた。しかし実際には、日本語のインターアクション能力が十分でない学生もあり、タスク実施にかなりの負担を感じる学生も混じるようになってきている。そういった諸条件の変化や想定

¹ 本稿では学年暦を示す年度を使わず、西暦年を用いる。

² 日本語母語話者との接触、インターアクションにより、言語習得が促進されると言える。外国語を学ぶということ自体が異文化接触とも言え、異文化理解をも目指したプログラムである（藤森・宮城・中村・荒川, 2013）。

外の事情を考慮した上で、プログラム全体のあり方について検証すべき時期にきているのではないか。本稿では、SSWP2017 及び SSSP2017 の実施状況及びプログラム評価アンケート結果をもとに、SS プログラムのこれまでの成果と今後の課題について述べる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第2節でSSプログラムの発足の経緯とSSWPの概要について説明し、第3節でSSSPの概要について説明する。次に、第4節で異文化体験型シラバスとSSプログラムの現状について示す。そして、第5節でSSWP2017とSSSP2017のプログラム評価アンケート結果から、「異文化体験型シラバス」の実施状況について分析・考察をする。第6節は、本調査から得られた結果と今後の課題について述べる。

2. SSWPの概要

2. 1 SSWP開始までの経緯とプログラム期間

SSWPは1月初旬から2月初旬にかけての約1か月間行っている(表1)。毎年この時期に行われるのは、SSWPが参加者としてオーストラリア及びニュージーランドの大学生を想定していたためである(藤森ほか, 2013)。宮城(2014)では、オセアニア地域の学習者は彼らにとっての夏休みである12月～2月に日本での集中プログラムを希望しているが、この時期に南半球の大学生に特化した日本語プログラムを実施している日本の大学はほとんどないと指摘している。これらのオセアニア地域の学習者のニーズに応えるため、SSプログラムが発足することになった。

表1 SSWPのプログラム期間

	期間
SSWP2012	2012年1月11日～2012年2月9日(30日間)
SSWP2013	2013年1月9日～2013年2月8日(31日間)
SSWP2014	2014年1月8日～2014年2月7日(31日間)
SSWP2015	2015年1月7日～2015年2月6日(30日間)
SSWP2016	2016年1月7日～2016年2月5日(30日間)
SSWP2017	2017年1月11日～2017年2月8日(29日間)

2. 2 SSWPの参加者数と所属大学

SSWPの参加者は、2012年、2013年は24名であったが、2014年以降は29名、

24名、43名、37名と推移している(表2)。SSWPは定員を40名としていることから、2016年以降は40名前後となっている。また、SSWPの参加者は2.1でも述べたように、オーストラリア及びニュージーランドの大学からの留学生が多い。メルボルン大学が累計88名と最も多く、次いでオークランド大学(44名)、オーストラリア国立大学及びヴィクトリア大学ウェリントン(13名)となっている。参加者の多い上位4校はいずれも交流協定校であり、オーストラリア国立大学とは2001年度に、メルボルン大学、オークランド大学とは2011年度に、ヴィクトリア大学ウェリントンとは2012年度に提携が成立している(宮城, 2014)。

表2 SSWPの参加者数と所属大学

	所属大学	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計
1	オークランド大学	8	5	5	6	9	11	44
2	オーストラリア国立大学		9	1	1	2		13
3	韓国外国語大学校						1	1
4	極東連邦大学					1		1
5	グアナフト大学					1		1
6	上海外国語大学						6	6
7	首都師範大学						1	1
8	台湾師範大学				3			3
9	ダッカ大学						1	1
10	チュラーロンコーン大学					1		1
11	北京大学					2		2
12	ヴィクトリア大学(ウェリントン)	2	1	5	2	2	1	13
13	メキシコ国立自治大学					3	1	4
14	メルボルン大学	14	9	18	12	20	15	88
15	ローマ大学「ラ・サピエンツァ」					2		2
	計	24	24	29	24	43	37	181

2. 3 SSWPの授業内容

SSWPでは日本語の授業は総合日本語コースのみ開講している(SSSPはビジネス日本語コースも開講)。日本語の授業以外に、日光への一泊研修旅行、e-Portfolio、歌舞伎・俳句等の日本文化に関する講義、大学近隣の街を探索するご近所オリエンテーリング、小学校訪問、個人指導が行われている(表3)。2014年からは、日本滞在時の災害に迅速に行動できるようにすることを目的とした防災館見学が取り入れられるようになった。また、2016年からはオセアニア地域専攻の学部学生との交流授業が行われている。プログラム最終日前日には、それまでに学んだ成果を見せる修了発表会を行っている。また、日本語の授業時には、ボランティアとして参加を募った学部学生に日本語サポーターとして授業補助をしてもらっている。日本語サポーターは主に、教科書の音読やペアワークの相手、修了発表会の準備(発音練習等)補助をする。

表3 SSWPの授業内容と各授業時間数

	日本授業 コマ数	小学校訪問	防災館見学	一泊研修	近所オリエ ンテーリング	交流授業	ePortfolio	個人指導	歌舞伎	俳句	漢字	修了発表会	総授業 コマ数
SSWP2012	38	4	2	2	4	0	4	4	0	2	2	3	65
SSWP2013	38	2	2	2	4	0	4	4	0	2	2	3	63
SSWP2014	38	2	2	2	2	0	4	4	0	2	2	3	61
SSWP2015	37	2	2	2	3	0	4	3	2	2	0	3	60
SSWP2016	33	2	2	2	2	2	4	4	2	2	0	3	58
SSWP2017	33	2	2	2	2	2	3	3	2	0	0	3	54

3. SSSPの概要

3. 1 SSSPの開始までの経緯とプログラム期間

SSSPは2014年にロシアの4大学(サンクトペテルブルク大学、ロシア国立人文大学、モスクワ大学、極東連邦大学)から合計11名を受け入れ、中級レベルのビジネス日本語コースとして始まった(宮城, 2015)。2015年からは、ビジネス日本語と総合日本語の2コースが開講されている。

2014年から2016年までは7月初旬に開講し、25日間前後のプログラムとなっていたが、2017年からは期間が短縮し、3週間以下の18日間となった(表4)。また、開始日も2017年には7月18日となり、2016年と比べ10日遅くなっている。この開始時期の変更は、参加留学生の宿泊施設を学内に併設する国際交流会館で全て賄うための必要措置として行った。2016年以前は宿泊施設としてホテルの活用をすることもあったが、アクセスの不便さが問題となり、2017年は国際交流会館のみで69名分の宿泊施設を確保することになった。交換留学生が国際交流会館を退去し、部屋が空くタイミングを待った上でのSSSP開始となるため、今後もプログラム期間の短縮と開始時期のずれ込みは続く可能性が高い。そのため、SSSP2017では、これまで25日前後で行っていた内容を約1週間短縮した期間で行わなければいけなくなり、午後に日本語の授業を行う³等の調整を余儀なくされた。

表4 SSSPのプログラム期間

	期間
SSSP2014	2014年7月2日～2014年7月25日(24日間)
SSSP2015	2015年7月10日～2015年8月3日(25日間)
SSSP2016	2016年7月8日～2016年8月2日(26日間)
SSSP2017	2017年7月18日～2017年8月4日(18日間)

³ SSSP2016までは午後に日本語の授業はしていなかった。

3. 2 SSSPの参加者数と所属大学

SSSPの参加者数は、2014年が11名、2015年が45名、2016年が64名、2017年が69名と毎年増えている(2017年現在、SSSPの定員は70名)。このように参加者数が増えてきた要因としては「本学では、本学学生の留学(送り出し)を積極的にを行い、本学教育の特徴の一つとしようとしている」(宮城, 2014)ことが考えられる。つまり、協定校に送り出す学生を増やすために、本学のSSプログラムでも定員を増やす必要があったということである。また、定員を上回る参加希望申し込みがこの数年続いていることも、参加者増加の要因と考えられる。これまでに参加した留学生は2014年から2017年までで累計189名、所属大学は述べ47校となっている(表5)。累計人数で最も多いのは香港大学の47名で、次いで上

表5 SSSPの参加人数と所属大学

所属大学	2014	2015	2016	2017	計
1 アインシャムス大学		1			1
2 厦門大学				1	1
3 エディンバラ大学				1	1
4 オークランド大学				1	1
5 開南大学				4	4
6 カザフ国立大学		2		1	3
7 ガジャマダ大学		1			1
8 カレル大学				1	1
9 韓国外国語大学校		1	2		3
10 カンピナス州立大学			1		1
11 極東連邦大学	3				3
12 グアナフアト大学			1		1
13 コーネル大学			1		1
14 国立政治大学		2		1	3
15 国立台湾大学			3		3
16 サウサンプトン大学				1	1
17 サラマンカ大学				1	1
18 サンクトペテルブルク大学	3				3
19 シーナカリンウィロート大学		1			1
20 上海外国語大学		7	26	8	41
21 上海対外経貿大学				1	1
22 シンガポール国立大学				1	1
23 淡江大学		4	3	4	11
24 天津理工大学				1	1
25 ノッティンガム大学				1	1
26 ノッティンガム大学 寧波				4	4
27 パラナー連邦大学				1	1
28 バルセロナ自治大学				1	1
29 フィリピン国立大学校		1			1
30 ペオグラード大学				2	2
31 北京語言大学		4	1	1	6
32 ボアンチ大学			1		1
33 ホーチミン国家大学・人文社会科大学		1			1
34 香港大学		10	17	20	47
35 マレーシア国民大学		2	2		4
36 マンチェスター大学		1			1
37 南カリフォルニア大学			1	3	4
38 モスクワ大学	2				2
39 ヤキェロン大学		1			1
40 ライデン大学				1	1
41 ラオス国立大学				5	5
42 リーズ大学		2			2
43 リュブリャーナ大学			2	1	3
44 レジャイナ大学		1			1
45 ロシア国立人文大学	3	2	2		7
46 ロンドン大学(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)				1	1
47 ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院:SOAS		1		2	3
計	11	45	64	69	189

海外国語大学の41名、淡江大学の11名となっている。夏期プログラムということもあり、東アジア地域の学生を中心に、多様な大学・地域から参加者が集まって来ていることはSSSPの一つの特徴だと言えるだろう⁴。この点で、オセアニア地域の学生が多いSSWPとは異なっている。

3.3 SSSPの授業内容

SSSPでは、総合日本語コースのみならず、ビジネス日本語コースも開講している。このビジネス日本語コースでは企業訪問を行っており、参加留学生は銀行やホテルの見学を通して日本企業の現場を肌で感じることができる。また、日本語の授業以外に、一日文化研修、歌舞伎・俳句等の日本文化に関する講義、個人指導も行われている(表6)。2015年からは毎週1コマの外大生交流授業が行われているが、これは筆者(宮城)担当の世界教養プログラム「地域社会と共生1A」の「多文化交流実践⁵」を履修している学部学生⁶と、SSSP参加留学生との交流を目的とした授業である。この「多文化交流実践」を履修する学部学生は外大生交流授業のみならず、日本語授業にサポーターとして参加もする。また、SSSPに参加する留学生に、日本や日本文化を紹介するプログラムを立案・実施し、参加留学生と交流を深めることになっている(2017年度世界教養プログラムシラバス)。

ご近所オリエンテーリングは2017年以降、e-Portfolio授業は2015年以降、実施していない。実施しなくなった理由としては、ご近所オリエンテーリングは、参加留学生の増加により課題の遂行に支障をきたすようになったことが挙げられる。つまり、ご近所オリエンテーリングで訪れる街に短時間に留学生があふれてしまい、「道を尋ねる」「特定の建物を探す」等の課題の遂行が難しくなったという訳である。また、e-PortfolioはSSSPのような短期のプログラムでは使い方に慣れた頃には修了になってしまい、その効果が薄いことが懸念された。そして、「外大生交流授業」が導入されたため、2015年以降はe-Portfolioが実施されなくなった。

⁴ 紙幅の関係で資料を示すことができないが、参加学生の専攻科目も文系、理系に広く散らばっており、学年も学部1年生から大学院生までと様々である。

⁵ この授業は当初から、夏季期間中に留学しない学部生に留学生と交流する機会を提供するために設定された集中授業である。

⁶ SSWPではボランティアとして、SSSPでは「多文化交流実践」の授業の一環として参加している東京外国語大学の学生を「学部学生」と総称している。

表6 SSSPの授業内容と各授業時間数

	日本授業	防災館見学	一日研修	企業訪問 または 文化研修	ご近所オリ	外大生交流 授業	ePortfolio	個人指導	歌舞伎・俳 句・日本の歴 史	修了発表会	総授業 コマ数
SSSP2014	26	0	2	3	2	0	3	3	4	3	46
SSSP2015	26	2	2	3	1	4	0	3	4	3	48
SSSP2016	28	2	2	3	2	3	0	3	2	3	48
SSSP2017	26	2	2	3	0	3	0	3	6	3	48

※SSSP2016のみ「一日研修」ではなく「一泊研修」だった。

4. 異文化体験型シラバスとSSプログラムの現状

「1. はじめに」でも述べたように、TUFS ショートステイプログラムでは「異文化体験型シラバス」が一つのキーワードとなっている。藤森ほか(2013)によると、異文化体験型シラバスとは、日本語母語話者との接触、インターアクションにより言語習得が促進されるという理解により、その日本語でのインターアクションを頻繁にもてるようにコースデザインの工夫を行ったシラバスのことである。また、外国語を学ぶこと自体が異文化接触とも言えるため、異文化理解をも目指している、と述べられている。

この異文化体験型シラバスは、SSWP2012のオセアニア地域からの24名の参加留学生を対象に考案された。実際の場面で役立つ日本語と日本の情報を学ぶ午前の授業、日本文化講義やタスク課題による午後の活動を有機的にリンクさせるよう設計がされたものである。

このようにして「異文化体験型シラバス」が考案され、SSWPは6回、SSSPは4回、実際にプログラムが実施されてきた。しかし、「2. SSWPの概要」、「3. SSSPの概要」にもあるように、プログラム発足当初と異なり、参加者数が増え、参加留学生の所属大学も多様性に富んだものになってきた。プログラム発足当初は、このSSプログラムへの参加を契機として長期留学を考える学生が増えることを期待して、「異文化体験型シラバス」を設定した。しかし、実際には来日経験が複数回ある参加者もあり、日本文化体験等の午後の活動が必ずしも貴重な体験とは見なされなくなってきた。また、SSSPについてはプログラム開始時期が後ろにずれてきたということと、それに伴い、期間短縮が余儀なくされているという事情もある。こういったプログラム実施条件の様々な変化に加え、当初想定していた異文化体験ができるプログラムとなっているか、2017年の実績をもとに考察したい。特に、日本語母語話者との接触、インターアクションがもてるプログラムとなっているかという点について、参加留学生を対象に行われるプログラム評価アンケートより分析・考察をする。

5. プログラム評価アンケートによる調査

5. 1 調査方法

異文化体験型シラバスの今後の方向性を探るに先立ち、SSWP2017、SSSP2017の実実施時に行われたプログラム評価アンケートを中心に分析する。このプログラム評価アンケートは、修了発表会が行われた日の午後に行われる。アンケート内容⁷は主に、①日本語授業に関する質問、②日本語以外の授業または午後・週末の活動に関する質問、③東京外国語大学での生活全般に関する質問（設備や環境について）、④プログラム全般に関する質問に分けられる。本稿では、中でも②における「日本人とどんな交流をしましたか」という質問と、④における「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」という質問を分析の対象とする。この2つの質問を分析の対象とした理由は、個別の授業や活動に特化した質問ではないため、プログラム全体を俯瞰した意見が得やすいと考えたからである。また、選択式ではなく自由記述式の回答となるため、肯定的回答・否定的回答のいずれの場合も、より強く感じたことが現れやすいのではないかと考えた。

5. 2 調査対象

調査対象はSSWP2017に参加した37名のプログラム評価アンケート及びSSSP2017に参加した69名のプログラム評価アンケートである。また、比較対象としてSSWP2012からSSWP2016までの5回分、SSSP2014からSSSP2016までの3回分のアンケート結果も調査対象に加えた。

5. 3 調査の手順

プログラム評価アンケートの「日本人とどんな交流をしましたか」と「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」という質問に対する自由記述式の回答から、日本語母語話者とのインターアクションについて言及していると思われるものを全て抜き出した。「日本人とどんな交流をしましたか」という質問の場合、全ての回答が調査対象となるが、「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」という質問の場合は、交流について言及していると筆者が判

⁷ アンケートの質問項目は毎回全て同じではなく、プログラム内容に合わせて適宜調整している（例えば、SSWPでは一泊研修旅行が行われているため、関連した質問が追加されるが、SSSPではSSSP2016を除いて一泊研修旅行は行われていないため、関連した質問はない）。

断したものを抜き出した⁸。そして、これらの回答を、肯定的な評価 (Good=G)、否定的な評価 (Bad=B)、肯定的でも否定的でもない評価 (Neutral=N) に分類した。分類作業は、3名 (内海及び事務系職員2名) で行い、結果が2名とも同じ場合⁹は、その2名の判断を採用した。3名それぞれ結果が異なった場合¹⁰は肯定的でも否定的でもない評価と見なし、Nと判断した。

また、交流に関するコメントは、日本語授業に関する質問や午後・週末の活動に関する質問にも書かれることがあったが、プログラム全体ではなく個々の授業や活動へのコメントとして見なし、今回の分析対象からは外した。

5. 4 調査結果

5. 4. 1 SSWPの調査結果

SSWP2014からSSWP2017までのプログラム評価アンケートから、交流に関する評価を分類した結果を表7にまとめた。アンケート項目は回によって異なることもあり、SSWP2012では「日本人とどんな交流をしましたか」(質問1¹¹)が、SSWP2014では「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」(質問2)が含まれておらず、そのため回答も得られていない。回答は日本語あるいは英語できるように指示している。質問1に関してはSSWP2013では肯定的評価が21%となっているが、SSWP2014以降は41%、58%、55%、43%となっており、有効回答者数の40%以上が肯定的評価である。一方の否定的評価はSSWP2014の31%を除き、概ね20%前後であることがわかる。

⁸ 「日本人とどんな交流をしましたか」については、回答全てが分析対象となる。

⁹ 例えば、3名の振り分けが、GGBとなった場合、2名分の振り分けを優先させGと判断した。

¹⁰ 3名の振り分けが、GBNとそれぞれ異なっていた場合は、Nと判断した。

¹¹ ここでは便宜的に「日本人とどんな交流をしましたか」を質問1、「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」を質問2としている。

表7 各SSWPプログラムの交流に関する評価

質問1	SSWP2012			SSWP2013			SSWP2014			SSWP2015		
	G	N	B	G	N	B	G	N	B	G	N	B
	-	-	-	5(21%)	12(50%)	5(21%)	12(41%)	8(28%)	9(31%)	14(58%)	6(25%)	4(17%)
質問2	G	N	B	G	N	B	G	N	B	G	N	B
	2(8%)	0(0%)	2(8%)	0(0%)	2(8%)	3(13%)	-	-	-	0(0%)	3(13%)	0(0%)
アンケート有効回答者数	24			24			29			24		
プログラム参加者数	24			24			29			24		

質問1	SSWP2016			SSWP2017			累計		
	G	N	B	G	N	B	G	N	B
	23(55%)	14(33%)	5(12%)	16(43%)	13(35%)	8(22%)	70(39%)	53(29%)	31(17%)
質問2	G	N	B	G	N	B	G	N	B
	0(0%)	0(0%)	8(19%)	0(0%)	0(0%)	1(3%)	3(2%)	5(3%)	13(7%)
アンケート有効回答者数	42			37			180		
プログラム参加者数	43			37			181		

※ %は有効回答者数に占める割合を示す

実際に、SSWP2017の否定的評価の詳細を見てみると、内容は以下のとおりである。

1. あまり日本人と接触しませんでした。これについては残念だと思います。ホームステイの家族と話すのも、一緒に食べるのもすごく楽しかったです。また機械(原文ママ)があったらもっと日本人の学生と交流して日本人の友達をつくってみたいと思っています。
2. 簡単なあいさつだけでした。
3. ない。
4. Talking to store attendants and asking people for directions. Occasionally I would talk to some Japanese people who made conversation but most assumed I did not speak Japanese therefore I did not speak to many Japanese people outside class.
5. Very little. Asking directions, talking to staff. Enquiring about various things.
6. Due the time frame of this program, many Japanese university students were busy studying for the exam, after the exam, everyone is on holidays. Hence in University, we barely had any contact with Japanese people. But outside of the class, we mainly used Japanese to ask shop keepers pr policemen regarding certain matters.
7. I dont have interaction with Japanese outside class...

8. at the shops I talk to them to order meals. In public and especially on the train they all stare at you which could be interpreted as a little rude, especially for people who grew up in Western cultures

回答1～8の否定的評価からは、道を尋ねたり、店員や大学職員と話したりする以外に授業外で日本語を使う機会があまりなかったという指摘が見られる。また、回答6ではその原因として、SSWPが学部学生の試験期間と重なるからだという指摘をしている。事実、2017年(2016年度)の学部学生の秋学期授業終了日は1月20日となっており、1月11日から2月8日までのプログラム期間中の特に前半は、学部学生に対して積極的なプログラムへの関わりを促すことは難しい。日本語サポーターとしてSSWP2017に協力してくれた学部学生は14名いたが、日本語授業初日からサポートに入ってくれたのは6名で、他の8名はプログラム中盤以降になってからの参加だった。日本語授業における学部学生のサポート業務がそのまま否定的評価につながったとは考えにくい、プログラム前半に学部学生との交流の機会が限られていたことは事実である。

また、肯定的評価として分類されたものには次のようなものもある。

9. Outside the class, most of the time I talked with the Japanese people in the train station, book store, Supermarkets. In the train station, I asked their help to find out the right platform of my decided places and then started to talk about my country and Japan. In the book stores and Supermarkets, most of the time I was talking about the prices of the books and products and then my country and Japan.

回答9は、道を尋ねたり店員と話したりしたという点では否定的評価をした学生と同じ条件にある。しかしその後、回答9の学生は自国の話や日本の話をして会話を広げているようである。回答9の学生は初中級レベルのクラスに属していたため、日本語能力が肯定的・否定的評価をするときに影響したとは考えにくい。また、質問2の「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」で交流について否定的評価をしていた学生のコメントは次のような内容であった。

10. もっと外大生たちと交流できたらよいと思う。

この学生が中級後半レベルのクラスであることから、やはり日本語能力が交流に対する評価に影響したとは考えにくい。プログラム評価アンケートからは窺い知ることはできないが、学生の異文化接触に対する積極性やコミュニケーションを取ろうとする意欲による違いから評価が分かれた可能性もある。

5. 4. 2 SSSPの調査結果

一方、SSSPにおけるプログラム評価アンケートはどうなっているのか。プログラム評価アンケートから、交流に関する評価を分類した結果を表9にまとめた。「日本人とどんな交流をしましたか」という質問1に対しては、肯定的評価をしている回答が多い。しかし、質問1はSSSP2014とSSSP2015でしかされておらず、SSSP2016及び2017には交流について問う質問がない。「このプログラムに提案・要望等があれば書いてください」という質問2に対しての交流に関する回答は、SSSP2017では否定的評価が多く見られた(交流に関するコメント14のうち、13は否定的評価であった。)SSSP2014から2016に至るまでは、交流に関するコメント自体がほとんど見られなかったのに対して、SSSP2017ではコメントが増えている。SSSPの場合、2014年から2016年まで、交流に関しての否定的評価はほとんどない。しかし、SSSP2017では質問2の否定的評価が17%となっている。この点において、毎回一定数の否定的評価が見られたSSWPとは様相を異にしている。

表8 各SSSPプログラムの交流に関する評価

	SSSP2014			SSSP2015			SSSP2016			SSSP2017			累計		
	G	N	B	G	N	B	G	N	B	G	N	B	G	N	B
質問1	8(73%)	2(18%)	0(0%)	20(49%)	2(5%)	2(5%)	-	-	-	-	-	-	28(15%)	4(2%)	2(1%)
質問2	G	N	B	G	N	B	G	N	B	G	N	B	G	N	B
	1(9%)	0(0%)	0(0%)	1(2%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(2%)	2(3%)	1(1%)	0(0%)	12(17%)	3(2%)	1(1%)	15(8%)
アンケート有効回答者数	11			41			63			69			184		
プログラム参加者数	11			45			64			69			189		

※ %は有効回答者数に占める割合を示す

SSSP2017の交流に関する否定的評価13名のコメントのうち、7名は外大生交流授業を修了発表会準備に充てたことに対してのものだった。例えば、回答11のようなコメントである。

11. It should be a real interacting section, but not a presentation in front of the people.

しかし交流授業の一部を修了発表会準備に充てた点については理由がある。SSSP2017はそれまでの3年間とは異なり、プログラム期間が18日間と大幅に短縮された(表4参照)。そのため本プログラムの集大成である修了発表会の準備とリハーサルを外大生交流授業の時間帯を使って行うことにしたのである。多文化交流実践を履修している学部学生が修了発表会準備をサポートすることにより、ゴールが明確になり、課題遂行型の積極的な交流が生まれることを期待してのこ

とであった。しかし SSSP2017 は参加留学生が 69 名、サポートをする学部学生が 14 名と非常に大人数であった。授業が行われる JLC-TUFS には、合計 83 名を余裕をもって収容できる教室はなく、予め分けられたグループが指定された小教室に集まる形式を取ることになった。そのため、担当者の指示が行き渡らず、混乱を来す場面も見られた。これは本来、交流を目的とすべきところ、交流と修了発表会準備という 2 つの目的を立ててしまったため、「交流のための時間」と認識している参加留学生に不満をもたらしてしまったと思われる。

また、日本語能力にあまり自信がない学生の中には回答 12 のようなコメントをしている者もいる。

12. I think it might be better to organize the interacting class groups by speaking ability. That way, people who speak at a more advanced level can interact, and those with lower speaking abilities don't feel left out or lost during the interacting class.

SSWP2017 のプログラム評価アンケートからもわかったことであるが、同じ状況下であっても、学生自身の性格や積極性によって感じ方が異なるようである。交流場面において、日本語能力が異なる同士でグループになることを楽しむ学生もいれば、それを楽しめない学生もいる。自分より日本語能力が高い人と同じグループになることに抵抗があると感じる学生がいることを、少なくとも運営側は知っておくべきである。また、授業担当者の意図を事前に学生に説明しておくことも重要だと考えられる。

6. 本調査から得られた結果と今後の課題

SSWP2017、SSSP2017 を中心に、SS プログラム評価アンケートから交流に関する自由記述式の回答を分析することにより、以下の結果が得られた。

〈SSWP のプログラム評価アンケートから〉

- 交流に関する評価は、否定的評価より肯定的評価のほうが多い
- 毎年、否定的評価も一定数見られる
- SSWP2017 で否定的評価をしている参加留学生は、授業外での交流の少なさを指摘しているが、同時に同じ状況を肯定的に評価する学生もいる

〈SSSP のプログラム評価アンケートから〉

- 交流に関する評価は、肯定的評価のほうが多い
- SSSP2017 のみ否定的評価が多く見られるが、その原因としては学部学生と

の交流授業に対して期待していることと実際の授業内容が合っていなかったことが推測される

SSWPの場合、学部学生はボランティアとしての参加であり、いつどのようにプログラムに参加するかは、あくまで学部学生の自主性に委ねられている。そのため、期末試験終了後のプログラム後半に日本語サポーターとして参加してくる。加えて、日本語授業の時間は交流のための時間ではなく、あくまでも日本語のサポートをするために来てもらっているため、日本語能力に自信がない、あるいは積極性に欠ける学生にとっては、交流の機会と捉えにくいと思われる。

一方、SSSPにおいては、SSSP2017を除いて交流に関しては肯定的評価が多かった。この理由として、学部学生はボランティアとしてではなく、「多文化交流実践」の授業の一環として外大生交流授業や日本語授業に参加するため、留学生との接点がSSWPに比べて多いことが挙げられる。加えて、学生企画イベントを午後や週末に行うため、それらのイベントを通して学部学生と留学生との交流が深まると思われる。事実、SSSP2017のプログラム評価アンケートにおいても、SSWP2017で散見された「道を尋ねたり、店員や大学職員と話したりするときだけ日本語を使った」というコメントはほとんど見られなかった。

これらの結果から、今後の課題として

1. 日本語能力に自信のない学生には「自然な交流」を促すのではなく、プログラム運営側が組織的に交流の機会を提供する
2. 「交流授業」となっている時間は、あくまで交流のための時間とする（相乗効果を期待して、他の活動を組み入れない）

ことが挙げられる。今後のSSプログラムの方向性としては、次のようなことが考えられる。「異文化体験型シラバス」で謳われている「午前中の日本語授業で学んだことを、午後の活動で生かす」ことは、SSWPはともかく、2018年以降もプログラム期間が短縮される予定のSSSPでは難しい。しかし、「日本語でインターアクションを頻繁にもてる」プログラムであることは、参加留学生の交流への期待の高さからも必要なことであると思われる。従って、「交流」の形態や時間数、タイミングを考慮しつつ、より満足度の高いSSプログラムを提供していきたい。

参考文献

- (1) 東京外国語大学 (2017)「世界教養プログラム 開講科目一覧 (2017 年度)」 「地球社会と共生 1A」 (https://gakumu-web1.tufs.ac.jp/Portal/Public/Syllabus/DetailMain.aspx?lct_year=2017&lct_cd=180014&je_cd=1)
- (2) 藤森弘子・宮城徹・中村彰・荒川洋平 (2013)「異文化体験型シラバスにもとづいたショートステイプログラム 2012 の実践と課題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39, 137-152
- (3) 宮城徹 (2014)「ショートステイプログラム」『2013 年度留学生日本語教育センター年報』

**Report on the TUFS Short Stay Program 2017:
Implementation results of ‘Intercultural Experience-Oriented Syllabi’
and future tasks**

UTSUMI Yoko, MIYAGI Toru

Key Words: ‘Intercultural Experience-Oriented Syllabi’, TUFS Short Stay Program,
Questionnaire for program evaluation

This paper examines the findings from the students' questionnaire results on the TUFS Short Stay Program which has been conducted at Tokyo University of Foreign Studies since 2012. For the past five years, the Short Stay Winter Program (SSWP) has been conducted six times and the Short Stay Summer Program (SSSP) four times. It is necessary to re-evaluate the ‘Intercultural Experience-Oriented Syllabi’ due to certain changes of circumstances such as an increasing number of participants and stay period length.

The result of the student’s questionnaire indicated the following findings with the questions ‘What kind of interaction did you have with Japanese people outside of class?’ and ‘Please write your suggestion on how we can improve this program’.

There were a certain number of participants that evaluated negatively about the interactions had within SSWP. Although most of the participants of SSSP evaluated the interaction positively, some SSSP2017 participants evaluated negatively. The reasons given for why they were not satisfied the amount of interaction was due to a gap between the actual content of the interactive classes and participants’ expectations.

From the results obtained in these investigations, we aim for more organized interactive sessions in future SSWP and SSSP.